

ドイツのTVメディアにおけるトルコ系移民のドイツ語 — 「役割語」としての新たな研究の可能性—

田 中 翔 太

論文要旨

ドイツでは現在、移民背景を持つ者が多く生活している。そのなかでも1960年代からドイツへ来たトルコ系移民は、ドイツの外国人人口のなかでも群を抜き、最も多い割合を占めている。大都市で独自の共同体を形成しそのドイツ語力も問題視されるトルコ系移民のドイツ語は、1990年代半ばまでドイツ社会からはネガティブな評価を受けていた。本論文ではそのようなトルコ系移民のドイツ語の評価が変化する一つの要因となった、2000年代からのドイツTVメディアにおける「トルコ系移民のドイツ語」の需要の増加に着目する。コメディ番組により「トルコ系移民のドイツ語」は言語的にステレオタイプ化が進んだと言われているが、その描写の際に、特定の傾向性があるのではあるだろうか。更に、コメディ動画を見た視聴者は、どの言語描写を「らしい」と解釈しステレオタイプ化しているのではあるだろうか。本論文はこの2つの問題提起から、コメディ番組で描かれる「トルコ系移民のドイツ語」を新たに研究する可能性を模索するものである。

キーワード【トルコ系移民、ドイツ語、評価、TVメディア、ステレオタイプ化】

1. トルコ系移民に対するドイツ社会からの評価

ドイツには現在、多くの外国籍所有者が生活している。2011年のドイツ人口を観察すると、総人口およそ8183万のうち外国人の人口が736万程を占め、ドイツに生活する人々のうち、11人に1人が外国籍を有するという結果になる(Statistisches Bundesamt 2012)。さらに外国人人口を出身国別に分類すると、本論で対象とするトルコ系移民はおよそ約162万人おり、2位のイタリア系の約51万人、3位のポーランド系のおよそ42万人に対し、群を抜き多いことが分かる。これらのトルコ系移民は1960年代に外国人労働者、あるいは紛争の難民として渡独したのちドイツ国内に定住し、今日では世代もおおよそ第三世代にまで渡っている。ただし移民のなかでも多数派を占めるトルコ系に対するドイツ人からの社会的なイメージは、渡独当初は決して肯定的なものではなかった。彼らがドイツ社会から持たれていた印象を象徴する語がある。ポリネシア語の *kanaka* 「人間」が由来の、*Kanake* という名詞だ。元々は「ポリネシア島、また南太平洋諸島の原住民」(DUDEN 1976: 1415) という意味で使用されていた同語は、19世紀にポリネシア系、オセアニア系の仕事場における同僚を呼ぶために、ドイツ人の船乗りによってポジティブな意味合いで用いられていた。しかし

1970年代になると新たな意味が加わり、元々の意味の他に、50年代半ばよりドイツに定住した外国人労働者、特にトルコ系等の南欧系の容姿を持つ者を指して蔑む、「教養がなく、無知な人間」という別の意味も生じてきたのだ(田中2011:34を参照)。だが1990年代半ばになると、ドイツ社会からのトルコ系移民に対するイメージが一部改善されてくる。その要因は大きく分けて4つ考えられると筆者は見ている。それを時系列に沿って見ていくと、まず第一の要因が、*Kanake* という語に付随するトルコ系移民に対するイメージの変化である。1995年になると、トルコ系移民第二世代にあたる作家の Feridun Zaimoglu が、ドイツにおいて『カナケの言葉：社会の周縁の24の雑音』(Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft) (Kanakは*Kanake*の語末音が欠落した同義語である)を出版する。同書はタイトルが示しているように、職種の異なるトルコ系移民(主に第二、第三世代)の24人に著者である Zaimoglu がインタビューを行い、トルコ系移民の声を紹介していくという内容の書である。この本の表題に敢えてネガティブな語 *Kanake* を使用することにより、Zaimoglu は「USAでの黒人意識運動(Black-consciousness-Bewegung)と似たように、個々の *Kanak* の下位アイデンティティがより一層決定的に、つながりと意義を自覚する」(Zaimoglu 1995: 17)ことを目的とした。実際にこの「カナケのことば(Kanak Sprak)」という言い回しはドイツの印刷メディアやTVメディアにおいて広く用いられ、トルコ系移民に焦点が当てられた。そして第二に、RapやHip Hop等の音楽において、「トルコ系移民のドイツ語」が使用されたという点である。2000年代になると一部の歌手が楽曲の歌詞に「トルコ系移民のドイツ語」を使用することで、音楽を聴く一部のドイツ人の若者からも「トルコ系移民のドイツ語」が評価を受けるということが起こった。そして第三の要因が、ドイツのTVメディアにおいて、「トルコ系移民のドイツ語」に対する需要が増加したことである。これは第二の要因とほぼ同時期に発生したと言える。2000年代にドイツのTVメディアにおいて「トルコ系移民のドイツ語」を話すコメディアンが登場し、それによりエスノコメディ(Ethno-Comedy¹⁾)という新たなジャンルのコメディ番組が生まれ、一種のブームのような状態になる。このことについて詳しくは、第2章で論じる。そして最後の要因が、特定の言語学者が「トルコ系移民のドイツ語」に対して評価を与えたことだ。2006年にまず、ドイツの言語学者 Heike Wiese が「トルコ系移民のドイツ語」を含む移民のドイツ語に対し新たに Kiezdeutsch (おおよそ「地域・社会方言としての都市地区の若者によるドイツ語」といった意味を内包する)という名称を与え、ポジティブな評価を与える論文を発表した。Wiese は論文発表後も新聞や雑誌、インターネット記事等を通して Kiezdeutsch がいかにポジティブかつ革新的な現象であるかを説き、ドイツ社会に発信し続けた。それを見たメディア受容者の「トルコ系移民のドイツ語」に対する見方や解釈に、一部影響を与えるという現象が起こったのだ。なお最後の要因について詳しくは、田中翔太(2012)を参照のこと。本論文ではこの四つの要因のうち、ドイツ社会でブームのような様相を呈した第三の要因、すなわちコ

メデイ番組を対象にし、コメディ番組における「トルコ系移民のドイツ語」の描かれ方に着目する。

2. 本論の狙いと分析対象

2.1 問題提起

前述のように、ドイツでは2000年代前半に「トルコ系移民のドイツ語」を扱ったコメディ番組が流行した。それに伴うドイツ社会からの「トルコ系移民のドイツ語」に対する評価の変化について、Kotthoff (2004) は次のように論じている。「少し前までは、ブロークンなドイツ語はドイツ市場において利用価値のないものだった。そして、学校や職場での成功の妨げになるものだった。最近10年の間に、それはどうやら変わったようだ」(Kotthoff 2004: 187)。また、トルコ系移民の出自を持つコメディアンで、エスノコメディの番組で成功した「Kaya Yanarの番組により、民族性に焦点を当て自己を意識した芸術作品は、一般大衆にまで到達した」(Kotthoff 2004: 186)とも主張している。すなわちこの論に則ると、1990年代半ば以降の移民を扱うコメディ番組のブームを通して、それまで日常生活において移民とあまり関わりのなかった層にまでこの「トルコ系移民のドイツ語」が波及し、評価が変化したことが分かる。その現象は、統計学的に見ても明らかである。2000年にAGF (Arbeitsgemeinschaft Fernsehforschung、テレビ調査研究団体)が行った調査では、2000年9月までにドイツTVメディアにおいて放送されていた全53のシットコムのうち、ドイツで生活する移民を主人公にした番組はひとつもなかった。また、当時のドイツでシットコムを成功させるためには、その番組の内容が「土着文化に関係する場合」(Schumacher/Hammer 2000: 568)であるとまで言われていた。しかし2001年になると先述のYanarが、移民を主人公にした„Was guckst du!“ (「何見てるんだ!?’’といった意味)というタイトルのシットコムを成功させるや否や、瞬く間にドイツのTVメディアでは、移民(特にトルコ系移民)を演じるコメディアンが台頭し始め、トルコ系移民を主人公に据え、彼らの日常生活を面白おかしく描写するコメディ番組が量産されるようになる。

これらトルコ系の移民を題材としたコメディ番組のなかで、言語的に彼らのことばはどのように描写され、扱われる傾向にあるのか。Androutsopoulos (2001b) は、次のように論述している。『『トルコ人ドイツ語』のメディアでの描写は、移民背景を持つ若者の社会言語学的な現実の要素を、『ブロークンなドイツ語』のステレオタイプ、個人特有語の要素と結合する、混合物、混成物として理解される』(Androutsopoulos 2001b: 330)。つまりここで示されているのは、TVメディアで描写される「トルコ系移民のドイツ語」は、必ずしも現実に充実なトルコ系移民のドイツ語ではなく、部分的にステレオタイプ化されたことばであるということだ。そこで本論では、大きく分けて次の2点を問題提起として設定し、次章からの

分析で詳しく考察していく。

- 1) 「トルコ系移民のドイツ語」がコメディ番組でステレオタイプ化されるに際して、その言語描写に特定の傾向性があるのだろうか。
- 2) また、コメディ動画を見た視聴者は、どの言語描写をトルコ系移民のドイツ語「らしい」と解釈し、ステレオタイプ化しているのか。

2.2 分析対象

以上の2点を考察するために、本論ではエスノコメディに分類されるシットコムのなかから、コメディアンがトルコ系移民を演じ、「トルコ系移民のドイツ語」を話す番組の動画(動画サイト『YouTube』に投稿されたもの)と、その動画に寄せられた書き込み(コメント欄)を分析していく。その際に4組のコメディアンを分析対象とし、出演する動画のなかで最も再生回数が多いものを3動画ずつ、計12動画選択した。また、その動画に寄せられた書き込みに関しても、2010年から2011年までの2年間に投稿されたものに限定し、計1142件を分析対象とした。なお、本論で対象としたコメディ番組には複数の選択基準を設けている。第一に、番組の主人公がトルコ系移民であり、コメディアン自身が持つ冠番組であること。第二に、番組の形態も、簡潔で回をまたがる展開の少ないシットコムか、あるいはコメディアンが舞台上で短い劇を演じるコメディショーであること。また番組の放送時期に関しても、Ceylanの2010年、2011年の番組を除き、全て2000年代半ばで統一した。本論で分析するコメディアンとコメディ番組については、次の表1でまとめた。

表1: 分析するコメディアンと番組

コメディアン	Kaya Yanar	Bülent Ceylan	Erkan und Stefan	Mundstuhl
出身国	トルコ=アラブ系	ドイツ=トルコ系	ドイツ人(両者)	ドイツ人(両者)
生年	1973年	1976年	1971年(両者)	1968年(両者)
対象番組 (放送年)	Was guckst du?! (2001-2005年)	Ganz schön Turbulent (2010年) Die Bülent Ceylan Show (2011年)	Voll krass! - Die Clip-Show mit Erkan & Stefan (2006年)	Mundstuhl (2007年)

今回対象とした4組のコメディアンのうち、Yanarがトルコ=アラブ系の出自、Ceylanは母親がドイツ人、父親がトルコ人という出自を持っており、両者ともにハーフではあるが、トルコ系移民の第二世代に含まれる人物である。そしてErkan und Stefanというコメディ・デュオは、John FriedmannとFlorian Simbeckのドイツ人2人組で構成されており、同様にMundstuhlも、Lars NiedereichholzとAnde Wernerのドイツ人2人組からなるコメディ・デュオ

ユオである。

3. 分析結果

第3章では分析結果としてまず、3.1でコメディ動画において、「トルコ系移民のドイツ語」のどのような言語描写の傾向性を観察することができるかを見ていく。そして3.2では、そのコメディ動画を見た視聴者が「トルコ系移民のドイツ語」の描写に対して、特にどの部分を挙げて反応しているのかを抜き出し、双方の相関性を見ていく。

3.1 コメディ動画からの分析

動画の分析では、今回対象とした全12動画の中から、Yanarの„Was guckst du?“というシットコムの1動画を例に挙げながら、詳しく見ていく。まず分析結果に移る前に、動画の登場人物と内容について触れておきたい。登場人物は2人で、主人公はYanarが演じるHakanという名前のトルコ系移民の若者、そしてもうひとりがドイツ人医師 (Arzt) である。物語の内容は、ディスコで足を蹴られ、足が上がりなくなったHakanが医師を訪ね、症状を説明するという場面から始まる。この動画の再生時間は計1分21秒で、そのなかでのHakanの総発語数は101語となっている。なお、動画のなかの2人の会話について詳しくは、巻末資料を参照のこと。

3.1.1 「トルコ系移民のドイツ語」に典型的とされる語彙の使用

まず注目したいのが、トルコ系移民が話すドイツ語に典型的とされる語彙が多く用いられているという点だ。Dirim/Auer (2004) は、典型的な語彙について次のように論じている。ドイツ語の「*krass* や *alder*、また注目を促す *ey* のような不変化詞も、粗野なトルコ人 (Proll-Türken)²⁾ のステレオタイプとして挙げられる」(Dirim/Auer 2004: 221)。この先行研究に出ている語はそれぞれ、*krass* が「ヤバい」、*Alder* が「お前」、*ey* が「おい」といった意味を持つ語である。*Alder* という語に関しては、もともと *Alter* 「年齢、老年、老人」というドイツ語名詞から由来しているのだが、*t* の部分を *d* と濁って発音し *Alder* という語が、今では「とりわけトルコ系移民の少年たちが使用する若者スラング『カナケー語 (Kanakisch)』において、人気が高い」(Ehmann 2008: 24-25) と言われている。動画を見ていくと、確かにこの語はHakanによって *Alter* ではなく *Alder*、あるいは *Alde* と濁ったかたちで発音されている。またこの語の登場回数は、Hakanの総発語数が101語のうち、*Alder* が1回、*Alde* が1回であった。さらにDirim/Auer (2004) で挙げられた *krass* や *ey* も、Hakanはそれぞれ1回と6回ずつ発している。さらにAndroustopoulos (2001a) は、それらの語彙の他にも、「*korrekt*、*ultra-korrekt* のような表現アイテムや言い方は、コメディで知られている」

(Androutsopoulos 2001a: 14) としている。今回対象としたコメディ動画においては、1回ではあるが、*korrekt* 「ヤバい」の語彙が登場した。

3.1.2 ドイツ語の方言の使用

次に挙げる特徴は、ドイツ語の地域方言的な要素を取り入れた方言語法の使用である。巻末資料を見ても分かるように、Hakan の発言には複数の箇所において、地域方言的な要素が含まれている。しかしそれぞれの要素を見ていくと、Hakan が話している一見方言のような要素は、特定の地域のものではなく、様々な地域の方言が混在していることが分かる。例えば Hakan が頻繁に発する *isch* という語は、一人称単数の *ich* 「私」の *ch* の音が *sch* と舌頂音化したもので、今日では典型的な「トルコ系移民のドイツ語」として広く認知されている³⁾。しかしこの語を *isch* と発音するのはトルコ系移民に限らず、ドイツの主に南部で話されている地域方言でも同様の発音の仕方がなされる。また発話順に見ていくと、5行目の *Tach* という語は *Tag* 「日」という名詞の北部地方の方言で、20行目の *net* は *nicht* 「ない」の、中部から南部にかけての方言である。このように Hakan は一見地域方言と取れるものを話しつつも、その地域は不特定で統一されていない。つまり、コメディ番組においてトルコ系移民が話すことばは方言「らしい」ことが重要で、その地域は重要ではないのではないだろうか。言い換えれば、コメディ番組でトルコ系移民の若者が方言語法を用いて話すことで、いわゆる特定のグループ（このことについては4.1を参照）に属す、地域方言しか話すことができないトルコ系移民「らしさ」を演出していると推測することができる。

3.1.3 文法的逸脱

また、Hakan の発話に見られる他の特徴は、正しいとされるドイツ語の文法からの逸脱である。例えばドイツ語は平叙文においては動詞が第2位に来るのだが、次に示す Hakan の発言1) では、平叙文にも関わらず動詞が文頭に来ている。さらに前置詞と名詞の間に置かれた冠詞も、誤っている。*Tür* 「ドア」という名詞はドイツ語で、3つある名詞の性（男性、女性、中性）のうち女性名詞に該当し、さらに状態を表す前置詞に掛かっているため、*meiner* となるのが正しい。

1) steh isch letzte woche wie immer in mein Disco-Tür

V S

(おりゃ先週いつもみたくディスコのドアに立ってる⁴⁾)

次に挙げる例2) もまた、複数の理由から文法的に逸脱していると言える。まずひとつめは、*hauen* 「殴る」という動詞が通常は手で何か、あるいは誰かを殴る際に用いる動詞であ

るのに対し、2) の例ではスネを「蹴られた」動作がこの動詞で表現されている。さらに、第三者がこの例文の発話者である Hakan を殴った場合、対格 *mich* を伴い表現すべきであるが、例文 2) では与格 *mir* で発言されているのだ。つまりここでは、人称変化も誤っている。

2) komm son Typ un haut mir voll gegens Schienbein!

(男が来るそんで俺のスネにすげえ殴る。)

3.1.4 コメディアン創作物としての語彙

そして最後に挙げるのが、コメディアンが作り出したと言われている語彙についてである。この特徴については、今回分析対象とした4組のコメディアンのうち、Erkan und Stefan と Mundstuhl に関連する事柄である。この2組のコメディ・デュオは、前述のように、ドイツ人でありながらそれぞれ番組内でトルコ系移民の若者を演じている。彼らはトルコ系移民を演じるにあたり、「トルコ系移民のドイツ語」には基盤のない、さらなる言語的特徴を番組内で使用したと言われている (Auer 2003: 261 を参照)。例えば Erkan und Stefan は、「価値や強調の意味として、*brutal* と *frontal* からなる *brontal* といったような特殊な表現をつくりだした」(Androutsopoulos 2001b: 329)。この造語は、ドイツ語の形容詞 *brutal* 「残酷な」と、同じくドイツ語の形容詞の *frontal* 「前面の」という2語が組み合わさったものだ。日本語で類似した語を探すことは困難だが、使用されている前後の文脈から見て、おおよそ「すげえ」や「ヤバい」といった意味が適当だろう。また Mundstuhl は、ドイツ語の名詞にある男性、女性、中性という3つの性を無視し、例えば代名詞としての *das* を、指示代名詞として使用するケース以外において、一貫して男性名詞対格で *den* と言った (Auer 2003: 261 を参照)⁵⁾。実際に Erkan und Stefan と Mundstuhl の動画をそれぞれ観察した際に、これらの語彙をコメディアンたちが会話中に用いている場面があった。これらの用法が3.2で分析対象とする視聴者にも「らしさ」として認知されているかどうかを考察するため、ここに記した。

3.2 コメント欄からの分析

コメント欄からの分析では、12の動画に寄せられた書き込みのなかから、傾向別に分類し、そのつど該当するコメントを引用した。引用文の見方としては、原文の右部分にカッコ書きで記した箇所に、コメントを投稿した者の年齢が表記されていた場合には年齢を、また4組のコメディアンのうちどの動画に対して寄せられたコメントかを示した。

3.2.1 「トルコ系移民のドイツ語」に典型的とされる語彙の使用

まず見ていくのは、コメディ動画でコメディアンによって使用されていた、「トルコ系移民のドイツ語」に典型的とされる語彙である。ひとつめの *Alder/Alde* について、コメント欄

では次のようなかたちで投稿者により反映されていた。

- 3) Alder die haben das voll dauf Alder XD (28 歳、Mundstuhl)
(お前、ヤツらかなりできるなお前 XD)
- 4) ALder erkan & Stefan können kacken gehen (年齢不詳、Mundstuhl)
(お前、Erkan&Stefan はクソしに行っていぜ)
- 5) voll konkret korrekt alde (22 歳、Mundstuhl)
(マジすげえヤバいなお前)
- 6) ey alda is des geil! (年齢不詳、Mundstuhl)
(おいお前、何てヤバいんだろう!)
- 7) zu geil alda (年齢不詳、Kaya Yanar)
(ヤバすぎお前)

コメント欄でもコメディアンと同様に *Alder/Alde* と *t* が濁ったかたちで書かれており、さらに語末音が *Alda* というかたちで書かれている書き込みも見ることができた。*Alder*、*Alde*、*Alda* を用いたコメントは、総合して 37 回観察することができた。

次に示すのは、*ey* 「おい」を用いたコメントである。先述の *Alder/Alde*、*Alda* と同様に、この語彙に関しても、今回分析したコメントのなかでは 52 回と多用される傾向にあった。

- 8) Wann könnt ihr wieder was neues machen, ihr seid so cool ey (14 歳、Erkan und Stefan)
(いつ新しいのやってくれるんだ、お前らマジクールだぜ、おい)
- 9) ey des ganze is voll krass un die beiden sin meine grössten vorbilder (19 歳、Erkan und Stefan)
(おい全部マジでヤバいしお前ら俺のいちばんの手本だぜ)
- 10) ey das sind die besten ja ablusut (17 歳、Erkan und Stefan)
(おいマジヤツら絶対最高だぜ)
- 11) das ja voll das buch ey :D (年齢不詳、Erkan und Stefan)
(これマジこの本だぜおい :D)
- 12) ey alda is des geil! (年齢不詳、Mundstuhl)
(おいお前、何てヤバいんだろう!)

また、*krass* 「ヤバい」についても 37 回と、*Alder/Alde* や *ey* とほぼ同じ頻度で書き込まれていた。

- 13) das Lied isss sooo krasss perversss (24 歳、Mundstuhl)

- (この曲、すげえヤバいい変態だぜ)
- 14) soo krass so ultracoll einfach bombe (17 歳、Mundstuhl)
(すげえヤバい、すげえ超クール、とにかくすげえ)
- 15) konkret krass (年齢不詳、Mundstuhl)
(すげえヤバい)
- 16) der typ is einfach nur krass (年齢不詳、Bülent Ceylan)
(こいつもう単にヤバいい)
- 17) absolut ultra krass !!!!!!!!!!!!!!! (22 歳、Mundstuhl)
(絶対に超ヤバい !!!!!!!!!!!!!!!)
- 18) 0:04 sau krass xDD der blick xDD (15 歳、Kaya Yanar)
(0:04 かなりヤバい xDD あの視線 xDD)

このように、Dirim/Auer (2004) の主張する「トルコ系移民のドイツ語」に典型的な語彙は、実際にコメント欄で用いられている例を観察することができた。しかし、Androutsopoulos (2001a) による「*korrekt*、*ultra-korrekt* のような表現アイテムや言い方は、コメディで知られている」(Androutsopoulos 2001a: 14) という主張に関しては、異なる傾向が見られた。例えば *korrekt* をコメントで使用している例も見られたが、その数は分析対象とした全 1142 件のコメントのうち、次に挙げる 2 件のみであった。ここから、典型的とされる語彙のなかにも、今回の分析の限りにおいては、視聴者に模倣されやすい語彙と模倣されにくい語彙があることが見て取れた。

- 19) Ey der Titel vom dem Video ist voll korekkt krass richtig. :D (年齢不詳、Kaya Yanar)
(おいこのビデオのタイトルマジヤバい合ってるな。:D)
- 20) Voll korrekt drauf dieser harkan (15 歳、Kaya Yanar)
(マジヤバいできるなこの Harkan)

3.2.2 方言の使用

次に、コメディアンが方言語法を使用することに対する視聴者からの反応がコメント欄で見られたので、述べておきたい。3.1.2 ですでに触れたように、今回分析対象としたコメディアンがトルコ系移民を演じる際に、複数の地域方言を混合して発話をするという傾向性が見られた。コメント欄の書き込みにおいても同様の傾向が見られ、特にコメディアンが話した地域方言を模倣し、さらに部分的にその地域方言的な要素に対して解釈を与えるというケースを観察することができた。

次に示す例は、Erkan und Stefan の動画に対して寄せられたコメントからの例である。

Erkan und Stefan はトルコ系移民を演じる際に、南ドイツのバイエルン地方の方言を交えて話すとされている。コメント欄では、その言い回しを模倣したのが見られた。

21) da hund verwiirrt oiida xD (年齢不詳、Erkan und Stefan)

(あん犬困つとるぜおメエ)

22) glaub halt voll minus GOil (21 歳、Erkan und Stefan)

(マジそう思うぜやばか)

23) boa krass oida sau geil de 2 (年齢不詳、Erkan und Stefan)

(うわヤバいおメエかなりヤバいこんふたり)

21) の引用文では、*Alder* をさらにバイエルン方言風にした *Oida*、22) の例文では *geil* 「ヤバい」を同じくバイエルン方言風に発音した *goil* が見られる。23) も同様で、*Alder* が *Oida* と書かれている。

そして次に示す引用文の 24) から 27) は、Ceylan の動画に寄せられたコメントだ。Ceylan はドイツ南西部の町マンハイム出身で、彼が演じるトルコ系移民の若者は、その地域の方言を話すという設定になっている。以下、Ceylan の動画に対して投稿されたコメントに、どのようなかたちでコメディアンの用いた方言が模倣されていたのか、あるいはコメント投稿者がその方言に対してどのような解釈を与えていたのかを示す。

24) der dialekt lebe hoch!!!! (27 歳、Bülent Ceylan)

(この方言万歳!!!!)

25) De Monnema Dialekt is äfoch de beschde uf de gonze Weld ;) (年齢不詳、Bülent Ceylan)

(マンハイムの方言てとむかくせけえでえつばん;))

26) Endlich mol enner der sich net für unsan Dialekt schämmd.... weida so! (年齢不詳、Bülent Ceylan)

(よっと俺たつの方言を恥ずねヤツ出てけた…この調子で行っとくり!)

27) Wie geil ,Des kann doch nicht er sein:) Siene stimme ist so geil und der Akkzent :) hamma (年齢不詳、Bülent Ceylan)

(何てヤバいんだ、彼ってあり得ね:) 声はかなりヤバいし、あのアクセント:) すげ)

Ceylan の動画に対するコメントでは、Ceylan がマンハイム方言を使用することに対して、多くのコメント投稿者が好意的な反応を示し、さらにはマンハイム方言を模倣したコメントも観察できた。

以上のことから、動画を閲覧した視聴者のコメントを観察した限りにおいても、コメディ

番組の視聴者は、トルコ系移民がさまざまな地域方言を話すことを違和感なく認識していることが分かる。またここで注目したいのが、視聴者が反応している方言が、主にドイツ南部のものであるという点だ。

3.2.3 その他の特徴

3.1のコメディ動画の分析から、コメディアンが演じるトルコ系移民はさらに、文法的逸脱やコメディアン自身が創作した新たな語彙を交えて発話をするということが分かっている。しかしながら今回コメント欄を分析した限りにおいては、文法的逸脱について反応したコメント、あるいは逸脱した文法を模倣したコメントは、1件しかなかった。また、コメディアンが創作した新たな語彙に関しても、*brontal*という表現についてコメント欄で模倣しているケースが3件のみ見られただけだった。すなわち、動画を見た視聴者がこれらの特徴に対してトルコ系移民のドイツ語「らしい」と感じているとは、今回の分析においては言い切れないであろう。

つまり、コメディアンが使用するとされている典型的な「トルコ系移民のドイツ語」の語彙である *Alder*, *ey*, *krass* といったいくつかの限られた語彙と、コメディアンが方言語法を話すことに対して、コメント投稿者から反応を得ているという結果になった。すなわち視聴者にとって「トルコ系移民のドイツ語」とは、典型的な語彙を幾つか使用し、標準ドイツ語ではない何らかの地域方言を話すことで、トルコ系移民「らしさ」を感じているのではないかとと言える。その裏付けとして、コメディアンが番組内でトルコ系移民を演じる際に、標準ドイツ語のみで話すケースは、見つけることができない。しかしコメディ番組を離れた実生活では標準ドイツ語を話すトルコ系移民はいるし、方言話者であっても標準語と使い分けをできる人は存在する。すなわち、コメディ番組で描かれるトルコ系移民が話すことばこそが、ステレオタイプ化された「トルコ系移民のドイツ語」なのだ。

4. TVメディアで描写される「トルコ系移民のドイツ語」の位置づけ

4.1 「役割語」としての「トルコ系移民のドイツ語」

これらコメディ番組等のTVメディアを通して広まった「トルコ系移民のドイツ語」は、ドイツの言語学者の間では、様式化⁶⁾されたものとして認識されている。「トルコ系移民のドイツ語」は、第1章で述べたような様々な要因が重なり、ドイツ社会において広く認知されるようになり、また評価も一部変化した。しかし同時に彼らの言語は、「メディアを通して広まり、様式化されている」(Androutsopoulos 2001b: 321)のだ。ここで、ひとつの疑問が浮かぶ。この様式化という概念が、金水(2003)による「役割語」の概念と類似しているのではないかという点だ。この章では具体的に両概念の相関性について論じ、TVメディアを

通して様式化された「トルコ系移民のドイツ語」の、新たな見方を提案していく。

金水 (2003) では「役割語」を、次のように定義づけている。

ある特定の言葉づかい (語彙・語法・言い回し・イントネーション等) を聞くと特定の人物像 (年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等) を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。(金水 2003: 205)

すなわちあることばが「役割語」として成り立つためには、まずそのことばの話し手と聞き手、あるいは書き手と読み手の双方が必要だということだ。この両者がある特定の言語意識を共有し、互いにそのことばに対して「〇〇らしい」と認識することにより、そのことばが「役割語」として機能するのである。また金水 (2003) はさらに、「役割語」について以下のような見解を加えている。「我々の役割語の知識は、けっして、現実の忠実な反映ではない。現実との距離は、近い場合もあれば、まったく現実と無関係、という場合まで、さまざまである」(金水 2003: 39)。つまり「役割語とは、言語上のステレオタイプに他ならない」(金水 2003: 35) というのだ。そのひとつの例として金水は、マーガレット・ミッチェル著の『風と共に去りぬ』に登場する黒人の侍女の台詞を挙げている。同書では主人公のスカーレット・オハラをはじめ、白人の登場人物が標準語を話しているのに対し、黒人の侍女は「ありがとうございます、お嬢さま、お休みなせえまし。」といったように「田舎ことば」で統一されている。読者は侍女が話す「田舎ことば」について黒人「らしい」と感じるのだと金水は論じている。これをコメディ番組で描写される「トルコ系移民のドイツ語」に当てはめるとどうなるだろうか。本論文の分析では、コメディアンが演じるトルコ系移民の若者は、いくつかの典型的とされる語彙の他に、複数 (主にドイツ南部) の地域方言を話し、この点について視聴者も反応し、模倣していることが明らかとなった。すなわち「らしさ」という点で言うならば、視聴者は「トルコ系移民のドイツ語」の母語話者が、南部の地域方言にいくつかの語彙を使用することで「らしさ」を感じているのではないだろうか。つまり『風と共に去りぬ』の黒人侍女が話す「田舎ことば」と同様に、トルコ系移民の若者を演じるコメディアンが地域方言を使用することにより「無教養さ」、「田舎者らしさ」を演出し、聞き手である視聴者も同様の「らしさ」を受け取っているのではないかということが推測できる。

ここで再び「役割語」の定義に戻る。金水 (2003) は、「役割語」としてあることばが成立するためには、一方で、ある「言葉づかい」が特定の人物「らしい」と認識されることが必要であるが、さらに特定の人物像を提示された際に、その人物「らしい」言葉づかいを想起できる際にも「役割語」として成り立つと主張している。この人物像について、コメディ

番組で描かれるトルコ系移民の若者の人物像には、何かしらの共通点は見いだせないであろうか。コメディ番組で描かれるトルコ系移民は総合的に、男性の若者である傾向がある。今回分析対象とした4組のコメディアンが演じたトルコ系移民についても同様で、全員がトルコ系移民の若者を演じている。さらに服装についても、幾つかの共通点が見られる。コメディアンたちは帽子、あるいはチェーンネックレスを身につけ、革ジャンパーかジャージを着用しているのだ。髪型についても、Yanar と Ceylan に限り長髪を後ろでひとつに束ねているという共通点がある。つまり、コメディアンが演じるトルコ系移民の人物像の特徴に関しても、特定のグループに所属する人物を演じているという共通性が存在するのだ。以上のことから、今回分析対象としたコメディ番組において演じられるトルコ系移民の若者は、いわゆる「田舎ことば」を話し、服装もだらしない「無教養」で「粗野」な存在であった。視聴者もそこに、トルコ系移民「らしさ」を感じ取っていると判断することができる。

4.2 「トルコ系移民のドイツ語」研究の可能性

これまで見てきたように、今回分析したコメディ番組でトルコ系移民を演じるコメディアンとそれを観る視聴者の間に、ある共通した言語意識が存在していることが分かった。しかしこの言語意識が双方に定着していると主張するには、より長期的な観察が必要だ。つまりTVメディア（特にコメディ番組）で描かれる「トルコ系移民のドイツ語」は、今まさに聞き手、あるいは読み手から「役割語」として認識されつつある段階にあると言えるのではないだろうか。これまで日本のメディア言語学の世界では、金水（2003）を皮切りに、文学作品や漫画、アニメーション等における「役割語」について、様々な研究が行われてきた。しかしドイツ言語学の世界では、「役割語」という観点から論じられた先行研究は現段階では少なく、まだ議論しきれていないのが現状である。しかし近年のドイツTVメディアにおける移民の言語的な描写のされ方を見ていくと、その描写が固定化しつつある傾向にあることが分かる。そこでは移民たちは、作り手により言語的に決まった「役割」を与えられているのではないかと推測できる。それは一方で金水（2003）の唱える「役割語」と重なる部分もあるし、また他方で、長期的に見た場合にそれが一時的な現象にとどまれば、田中ゆかり（2012）による「方言コスプレ」の定義と類似するという見方もできるだろう⁷⁾。ドイツにおけるこの分野の未開拓さからも、将来的にTVメディアで描かれる「トルコ系移民のドイツ語」を「役割語」として捉えることが可能になれば、ドイツ言語学においても新たな研究の方向性が拓かれるであろう。

5. まとめ

今回の分析結果を通して、大きく分けてふたつのことが言える。ひとつはコメディ番組で

描かれる「トルコ系移民のドイツ語」には特定の傾向性があり、それが視聴者にとって、ある面においては「らしい」と認識されている点だ。その「ある面」とは、今回の分析の限りにおいては、バイエルンやマンハイム等のドイツ南部の地域方言を用いた方言語法のなかに、*Alder/Alde* や *ey*, *krass* といった「トルコ系移民のドイツ語」に典型的とされる語彙が混在することだ。これらのトルコ系移民のドイツ語「らしい」とされる言語的要素が、コメディアンと視聴者の間に共通の言語意識として存在しているのだ。逆を言えば、視聴者がトルコ系移民のドイツ語「らしい」と思うには、方言語法にいくつかの語彙を混ぜれば成り立つということになる。

そしてもうひとつが、この「らしい」と認識される、部分的にステレオタイプ化されたことばが、「トルコ系移民のドイツ語」が金水 (2003) の唱えた「役割語」の概念にある点では結びつくということだ。コメディ番組におけるトルコ系移民については、先述の言語的特徴のみならず、外見の特徴にもある程度の共通性が見られた。このことから、コメディ番組においてトルコ系移民の若者が話すドイツ語を「役割語」という概念に当てはめると、「田舎ことば」しか話せないだらしない格好をした、「無教養」で「粗野」なトルコ系移民という像が浮上する。しかしコメディ番組で描かれる「トルコ系移民のドイツ語」を「役割語」と判断するには、より長期的な観察が必要であろう。今まさに発達段階であるコメディ番組で描写される「トルコ系移民のドイツ語」について、のちにその描写方法が固定し定着すれば、ドイツ言語学に新たな研究の方向性が拓けてくと筆者は考える。

資 料

- 1 Hakan: -lacht und murmelt- ... das is so geil!

—笑い、ぶつぶつ言う—…これすげえやべえ!

Arzt: Guten Tag!

こんにちは!

- 5 Hakan: Tach.

ちわっ。

Arzt: Soooo, Herr... Hakan, was genau hat Sie hergeführt?

それでは Hakan さん、どういった要件でしょうか (直訳: 何があなたをここへ連れて来たのでしょうか) ?

- 10 Hakan: Ja der korrekte Navigator un mein 3er BMW.

ああ、あのすげえナビと俺の BMW・3 シリーズだよ。

Arzt: hm, setzen Sie sich ruhig. Ich meine, welches Problem haben Sie genau?

う〜ん、それでは座って構わないです。厳密にどんな問題がおりますでしょうか?

- Hakan: Ey pass auf, steh isch letzte woche wie immer in mein Disco-Tür, komm son Typ un haut
15 mir voll gegens Schienbein !
おいい気をつけて聞け、オラ先週いつもみたくディスコのドアへ立ってる、男が来るそんで俺のスネの辺りすげえ殴る。
- Arzt: Aha, und jetzt haben Sie Schmerzen oder einen Bruch?
ほう、そして今、痛みあるいは骨折があると？
- 20 Hakan: Ey noch viel schlimmer, isch hab net zurückgetreten.
おいいもっとひどいぜ、オラ蹴り返さなかってん。
- Arzt: Tja, dann ist der Fall klar, der Kerl war größer als Sie!
ではこの場合、その男性があなたに勝っていたことははっきりしていますね！
- Hakan: Ey quatsch, hab isch keine Reflexe mehr!
25 おいバカめ、オラもう反射作用がねえんだ！
- Arzt: Ah, Tatsächlich? Also, das ist ein Hammer.
ああ、本当ですか？それでは、これはハンマーです。
- Hakan: Türlich is dasn Hammer, ohne Reflexe, Alder.
もちろんヤバいんだ (*Hammer* 「ハンマー」はドイツ語の話しことばで「ヤバい」
30 を意味する) 反射作用なしだぜ、お前。
- Arzt: Nein, das, ist ein Hammer, damit teste ich Ihre Reflexe. Mal freimachen bitte.
いいえ、これはハンマーだと言ったのです、これで反射神経を確かめます。ちょっと裾をあげてください。
- Hakan: Jei Jei.
35 ヨウヨウ。
- Arzt: Und?
どうですか？
- Hakan: Nix.
なんも。
- 40 Arzt: Hm, tatsächlich, keine Reflexe. Uh, ich probiers mal am Ellenbogen.
う〜ん、本当ですね、反射作用がありません。う〜ん、ちょっと肘を見てください。
- Hakan: Nix, siehst du! Scheiße, keine Reflexe Alde...
なんも、ほら見ろ！ クソ、反射作用なしだぜお前...
- Arzt: Na, kein Problem, das kriegen wir schon wieder hin, ph acht bis zehn Behandlungen.
45 まあ、問題ありません、治せます。8回から10回の治療になります。
- Hakan: Acht bis Zehn Behandlungen? Welcher Arsch solln das bezahlen?
8から10回？どのクソがそれを払うってんだ？

Arzt: Ja, Sie sind doch sicherlich privatversichert.

民間 (プライベート) 保険に加入しているでしょう？

50 Hakan: Ey, privat bin ich schwul oder was?

おい、プライベートで俺がゲイとでも言うのかよ？

Arzt: Jach, dann zahlen Sie halt alles selbst.

それでは全額自己負担するしかありませんね。

Hakan: Ey krass, meine reflexe sin wieder da, danke doc! Ha, ey mach mal Platz, will noch

55 jemandn zusammenstauchen!

おいやべえ、俺の反射作用が戻ったぜ、ありがとな医者！ハッ、おい場所開けな、ぶっ飛ばしに行つてやる！

点線 = 「トルコ系移民のドイツ語」に典型的とされる語彙

二重線 = 地域方言的要素

一重線 = 文法的逸脱

注

- 1) Ethno-Comedy を直訳すると、民族コメディとなる。Gring (2004) によると、「『エスノコメディ (Ethno-Comedy)』とは、新たに造り出された語である。広い意味で文化的な違いに取り組んだ、コメディアンらしい会話のことを意味する」(Gring 2004: 16)。エスノコメディと呼ばれる番組は Sitcom (シットコム、シチュエーション・コメディの略語) が多く、1話完結型で、話や展開が回をまたがることは稀である。また、同じ (舞台) セット上で物語が展開することも特徴である。内容としては主に、ドイツに生活する移民の日常を面白おかしく描写する傾向が強い。
- 2) この粗野というイメージは、ドイツ人の実生活でのトルコ系移民に対するイメージにも直結しているようだ。Keim (2002) は次のように論じている。

幾つかのドイツの大都市では、ある特定のトルコ語の形式、あるいはトルコ系の若者の話すことばの形式が、若者にとって威信に満ちたものへと発展している。この大都市環境の若者のことばとコミュニケーション行動について、既にメディアでは命名がなされている。それは、「ヒップホップ音楽に影響を受けたドイツ系トルコ人たちの通用語」、もしくは「粗野崇拜」である。(Keim 2002: 233)
- 3) トルコ系移民の発音の際の *cb* から *sch* への舌頂音化は、複数の言語学者により地域ごとに調査されている。それによるとこのトルコ系移民による舌頂音化の現象は、ドイツのヘッセン州における調査では見られたのに対し、ハンブルクの調査では全く見られず、またベルリンでも時折見られる程度であった (Auer 2003: 257, Deppermann 2007: 329 を参照)。すなわち、同じトルコ系移民でもドイツ全土でこの舌頂音化したかたちで発音するのではなく、地域により差があるのだ。しかしメディアにおいて「トルコ系移民のドイツ語」の言語的特徴としてコメディアン等に使用されたため、今日ではドイツ人からトルコ系移民全体が話すドイツ語の典型例と

- して理解され、ステレオタイプ化された特徴となっている。
- 4) 日本語訳は、筆者によるもの。以下すべて同様。
- 5) 例えば *Das ist so schnell, dass ich nur schätzen kann.* (速過ぎて、推測しかできない。) という文を *Mundstuhl* は、*Den is so schnell ich kann nur schätze.* と言うと Auer (2003) は論じている。ここでは主語に主格 *das* が置かれるはずだが、男性名詞対格の *den* で表現されている。
- 6) 「様式化するとは、自身あるいは架空の人物を、ある社会カテゴリーの一員として紹介すること。そしてその目的のために特定の言語的、また他の記号的手段を使用することを意味する。」 (Androutopoulos 2001b: 322)
- 7) 「方言コスプレ」とは、話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の「方言」(生育地方言)とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「○○方言」を、その場その場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容にあわせて臨時的に着脱することを指している (田中ゆかり 2012: 3 を参照)。

参考文献

- Androutopoulos, Jannis (2001a): From the streets to the screens and back again. On the mediated diffusion of ethnolectal patterns in contemporary German. Paper presented at the ICLaVE I Conference, Barcelona June 29, 2000 (IdS Mannheim) .
- Androutopoulos, Jannis (2001b): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von Türkendeutsch. In: *Deutsche Sprache* 4/2001, pp. 321–339.
- Auer, Peter (2003): ‚Türkenslang‘. Ein jugendsprachlicher Ethnolekt des Deutschen und seine Transformationen. In: Häcki-Buhofer, Anne (ed.): *Spracherwerb und Lebensalter*. Tübingen/Basel: Francke, pp. 255–264.
- Deppermann, Arnulf (2007): Playing with the voice of the other: Stylized *Kanaksprak* in conversations among German adolescents. In: Auer, Peter (ed.): *Style and Social Identities: Alternative Approaches to Linguistic Heterogeneity*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, pp. 325–361.
- Dirim, Inci/Auer, Peter (2004): *Türkisch sprechen nicht nur die Türken*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Ehmann, Hermann (2008): *Endgeil. Das voll korrekte Lexikon der Jugendsprache*. München: C.H.Beck.
- Gring, Susanne (2004): *Ethnischer Humor im Fernsehen. Eine Analyse der Formate, des Anspruchs der Gestalter und der Nutzung und Sichtweisen von Rezipienten in der multikulturellen Gesellschaft*. (Magisterarbeit) Universität Wien.
- 浜崎桂子 (2005) 「移民たちの『声』を書きとめる試み」〔『神戸外大論叢』第56号、11–25頁〕。
- Keim, Inken (2002): Sozial-kulturelle Selbstdefinition und sozialer Stil: Junge Deutsch-Türkinnen im Gespräch. In: Keim, Inken/Schütte, Wilfried (eds.): *Soziale Welten und kommunikative Stile: Festschrift für Werner Kallmeyer zum 60. Geburtstag*. Tübingen: G. Narr, pp. 233–259.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
- 金水敏 (編) (2011) 『役割語研究の展開』くろしお出版。
- Kotthoff, Helga (2004): Overdoing culture? Sketch-Komik, Typenstilisierung und Identitätskonstruktion bei Kaya Yanar. In: Hörning, Karl H./Reuter Julia (eds.): *Doing Culture. Neue Positionen zum Verhältnis von Kultur und sozialer Praxis*. Bielefeld: Transcript Verlag, pp. 184–200.
- Schumacher, Gerlinde/Hammer, Daniela (2000): Humorsendungen im Fernsehen: Angebot, Nutzung, Andorderungen. In: *Media Perspektiven* 12/2000. Frankfurt am Main, pp. 562–573.

Statistisches Bundesamt (2012): Bevölkerung und Erwerbstätigkeit. Ausländische Bevölkerung, Ergebnisse des Ausländerzentralregisters. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt. (https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/Bevoelkerung/MigrationIntegration/AuslaendBevoelkerung2010200117004.pdf?__blob=publicationFile) .

田中翔太 (2011) 「トルコ系移民のドイツ語 “Kanak Sprak” は誰のもの？—言語変種の混交、そして越境」〔『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第15号、31-52頁〕.

田中翔太 (2012) 「民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語—その認知過程における言語学者とメディアの役割をめぐって」〔『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第16号、81-104頁〕.

田中ゆかり (2012) 『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店 .

Zaimoglu, Feridun (1995): *Kanak Sprak: 24 Mifstöne vom Rande der Gesellschaft*. Berlin: Rotbuch Verlag GmbH.

ENGLISH SUMMARY

German Language of Turkish Immigrants in German Television Media

New Research Potential for the Study as Yakuwarigo

TANAKA Shota

There are many people with an immigrant background in Germany, especially the Turkish, who make up the largest ethnic minority in Germany. They tend to live in Turkish communities within urban districts, and their German proficiency has been viewed as problematic and had been receiving a negative evaluation by the German people until the mid-1990s. In this paper, I will concentrate on the increased demand for the “German Language of Turkish Immigrants” in television media since the onset of the 21st century, which is one of the factors that has led to a change in perception of the German spoken by young Turkish immigrants. I will explore a new research potential for the study of the language, which is often stereotyped by comedians, through the following two questions: 1) Is there a particular tendency to depict Turkish-German-language proficiency or lack thereof in the television media and 2) which aspects of such a depiction do viewers of programs perceive as “Turkish-like.”

Key Words: Turkish Immigrants, German Language, Evaluation, TV Media, Stereotypification.